

愛知県 歴史文化遺産マップ

神山と愛知の歴史

神山は『絵図郷村帳』に「かミ山村」と記されており、当時は浦添間切の一部でした。1671(康熙10)年に宜野湾間切の神山村となりました。



間切図 (沖縄県立博物館・美術館所蔵)

村の90%以上が純農家で家畜の飼育頭数も多く、農作物はサトウキビが主でサツマイモや大豆などが多く生産され、比較的裕福な集落で大きな屋敷が並んでいました。1908(明治41)年の沖縄県島嶼町村制により字神山となりました。

愛知は1780年代から100年程の間に神山村の東側に広がる赤土の荒れた耕作地に七家族が点々と移住した事に始まり、宜野湾村と神山村の一部に屋取集落が形成されました。親族単位でサトウキビ栽培と黒糖生産が行われました。1939(昭和14)年に字宜野湾の小学:愛知原・胡麻川原、字神山の小学:懇良増原・東原が分離独立し行政区の愛知が設置されました。

沖縄戦により集落の移動を余儀なくされた神山でしたが、1964(昭和39)年には市行政区設置規定により隣接する神山と愛知が統合して十九区となり、2012(平成24)年に愛知県と名称が変更されました。

屋取とは？

1700年代初頭、士族の自然増加に伴い失業等で生活に困窮する下級士族が増えたため、首里王府は転職を奨励し農村へ移住する者が増えました。

移住は地元百姓への配当後に放棄された耕地や王府の払い下げ地が生じた場合に行われ、移住者は耕地の中に点々と簡易な住宅を構え開墾耕作に従事しました。

帰農士族の増加は集落を形成させ旧来のムラに対し屋取集落と呼ばれましたが、必ずしも旧士族層だけでなく、周辺のムラの住民が移住して出来た屋取集落もあります。



④ フツチャガー

集落中央あたりに所在する水が染み出るジーシル(地汁)のカー(湧泉)で、ニープ(柄杓)で水を汲み洗濯に利用したそうです。愛知のウブガー(産泉)ともいわれています。

① 神山・愛知ヌールガー



宜野湾ノロに関わる湧き水という伝承があります。神山の人びとは、水不足の時にはヌールガーまで汲みに来たそうです。現在は字神山郷友会ハチウビー(初御水)の祭祀で拝んでいます。愛知の人びとは、この湧き水から産水を汲んでいたためウブガー(産泉)として敬っています。2013(平成25)年に市の登録文化財として登録されました(有形民俗文化財)。

⑤ トウン



旧神山集落北東側に現存する、石で造られた小さな祠の拜所でトウンムイとも呼ばれました。現在も普天間飛行場内であるため、字神山郷友会事務所横の合祀所に香炉が置かれています。

② ウシナー(闘牛場)跡



当時、闘牛は畜産奨励と娯楽の両面から盛んに行われました。勢子(闘牛士)が牛の鼻綱を握ってヤグイ(掛け声)をかけ、角を突き合わせて勝負をさせます。勝負は一方の牛が舌を出したり逃げ出したら負けと判定し、傷を負わせることはありませんでした。神山では土俵の周囲を高さ1m足らずの土手で囲んだ後原のウシナーで闘牛を行っていましたが事故が起き、集落北方の黒数原に新たに闘牛場を造りました。その後、観客席を増やすために中原と共同で造ったウシモーに移転しました。1915(大正4)年、愛知屋取の胡麻川原に牛組合が所有するウシナーが開設され、夏から秋にかけて毎月行われました。



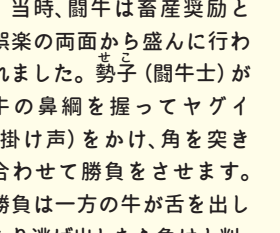
闘牛の勝利に喜ぶ家族(愛知) 1961(昭和36)年

③ サガイヌクシヌカー

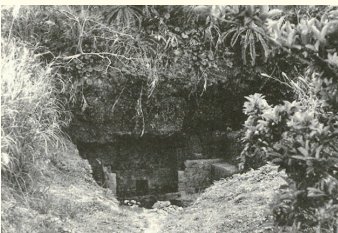


ニープの隙間から水が湧いており、チャーイ(旱魃)でも水は枯れなかったそうです。現在周辺は宅地の擁壁となっていますが、水は今でも湧いています。

⑥ 神山クシヌカー



旧神山集落南東側に所在した石積みので産水や正月の若水が汲まれました。上流にあるクシヌカーガシラが水源となり、周囲



のジーシル(地汁)が集まるので水量は多く、洗濯や夏の水浴びにも利用されました。現在は普天間飛行場内となっています。

近所

愛知では結(相互扶助)組織を「近所」と呼びました。土地整理(明治36年)頃までは、屋取全体はひとまとまりでしたが、明治時代の末頃に上近所・下近所に分かれ、大正時代になって、下近所が前近所・後近所に分かれました。墓普請や石材運搬などの大掛かりな作業は近所の区別なく屋取全体で取り組みましたが、屋敷造成・茅刈りなどの作業はそれぞれの近所で行いました。

線刻石板とは？



神山テラガマ洞穴から発見された、平らな石の表面に様々な象形や記号のようなものが刻まれた資料で、刻画石板とも呼ばれます。県内での発見数は15点ほどで、多くはグスク時代の遺跡と関連する拜所から見つかりました。主に片岩、変成岩などと呼ばれる石の表面に、鉄などの固く鋭利なもので文様等を刻んでいます。詳細は不明です。

愛知区のおゆみ

西暦 / 年号 / 出来事	愛知区のおゆみ
1609 万暦37	薩摩侵攻
1644 順治元	尚賢王、普天間参詣を始める
1649 順治6	「絵図郷村帳」に浦添間切の「かミ山村」と記載
1671 康熙10	宜野湾間切「神山村」誕生
1737 乾隆2	乾隆大御支配(元文検地)はじまる
1780年代	仲松(屋号)の先祖が中城間切と宇慶村から神山村東原に、内ハンタ比嘉小(屋号)の先祖が中城間切奥間村から宜野湾村愛知原に移住
1800~10	西比嘉(屋号)、東比嘉(屋号)の先祖が奥間村上原から宜野湾村胡麻川原に移住
1850年代	津波古小(屋号)の先祖が奥間村上原から愛知原に移住
1860年代	ワランザ米須(屋号)の先祖が那覇から、西伊佐(屋号)の先祖が胡麻川原に移住
1872 明治5	明治政府が琉球王国を琉球藩とする
1879 明治12	琉球処分により琉球藩を廃して沖縄県設置
1880年代	宮城(屋号)が東原に、多和田(屋号)が北谷間切嘉手納村から胡麻川原に移住
1882 明治15	中頭小学校廃校/宜野湾村に宜野湾小学校が開校
1901~03	神山でエイサーが行われるようになる
1902 明治35	中頭郡道(宜野湾並松街道)開通式
1904~05	宜野湾尋常小学校に高等科を設置し、宜野湾尋常高等学校となる
1906 明治39	愛知から初めて徴兵された津波古充栄氏と仲松弥良氏を見送るために集落の人々がフツチャヌサチーに集まった
1908 明治41	沖縄県島嶼町村制により宜野湾間切は宜野湾村となり、神山村は字神山となる
1911 明治44	神山の闘牛場を後原から黒数原に移設
1915 大正4	胡麻川原に牛組合所有の闘牛場開設
1916 大正5	この頃から旧習俗改善の可否をめぐるシルークルー闘争が始まる
1919 大正8	愛知でエイサーが行われるようになる
1924 大正13	この頃から政治対立をめぐるシルークルー闘争が始まる
1925~26	神山の綱引き、これ以降途絶える
1926 大正15	宜野湾のシルークルー闘争、県が調停
1932 昭和7	宜野湾尋常高等学校50周年式典で神山がエイサーを披露する
1939 昭和14	字宜野湾から愛知原・胡麻川原、字神山から東原・懇良増原を割いて愛知が行政区となる。比嘉松金氏が初代区長に就任
1941 昭和16	宜野湾尋常高等学校、宜野湾国民学校となる/太平洋戦争勃発
1941~42	神山の闘牛場、黒数原から中原に移設
1945 昭和20	米軍、宜野湾周辺まで侵攻(4/4)、普天間飛行場の建設開始(6月)
1947 昭和22	軍道5号線(現在の国道330号)東側に居住許可(1月)
1947 昭和22	軍道5号線(現在の国道330号)西側に居住許可(10月)
1948 昭和23	野嵩南初等学校が愛知に移り、宜野湾初等小学校となる(4月)
1950年代	愛知と神山のエイサーが復活する
1951 昭和26	米軍から飛行場内にある神山の聖地・墓の移転命令が出され、聖地の香炉や按司墓の骨壺をマーカーガマへ移す
1951 昭和26	宜野湾小学校となる
1962 昭和37	宜野湾市誕生
1964 昭和39	行政区編成により神山と愛知が統合し十九区となる
1966 昭和41	十九区エイサーはじまる
1968 昭和43	字神山郷友会設立
1974 昭和49	神山之塔建立(5月)
1976 昭和51	現字神山郷友会事務所横に合祀所を設ける
1984 昭和59	十九区公民館起工式
2008 平成20	創作市民劇「十九区交響曲」上演
2012 平成24	十九区から愛知区へ変更/『神山誌』発行
2013 平成25	「神山・愛知ヌールガー」市登録有形民俗文化財に登録
2014 平成26	住居表示実施/愛知1丁目~3丁目を設置される
2021 令和3	宜野湾小学校開校140周年